

からしだね通信

2022
12

1 巻頭言
2 6 マイクロビジネスのJIT生産
3 6 センター・ワークス報告
4 7 後援会などご協力者さま



闇と光

理事長 坂岡隆司

むかし何かの折、アメリカ、ミズーリ州のハンニバルという町を訪ねたことがありました。トムソーヤの冒険で有名な小さな町です。そこに、物語にも出てくる洞窟があって一つの観光スポットになっているのですが、好奇心から私は友人と一緒に入ってみました。しばらく奥に進んだところで、ガイドさんがこう言いました。「皆さん、ほんとうの闇を知っていますか？」そして、近くのスイッチをプツンと切りました。瞬間、光がいつさい無くなり、私たちは文字通りの闇に包まれてしまいました。身動きひとつできなのです。「ほんとうの闇を知っていますか」とガイドさんが言うだけの迫力が確かにありました。

今年に入って間もなく始まったロシア軍のウクライナ侵攻。一年になろうかというのに、戦火は収まりそうにありません。暗い悲惨な現実が、この時間も繰り広げられています。

先日、NHKのドキュメンタリーで、確か戦争と俳句とかいった番組だったと思いますが、空爆を受けながら首都で暮らすある一人の女性の、こんな句が紹介されていました。

星の光

街の灯

空に去ったよう

爆撃を受け、街の明かりが消えるほどに、空の星は輝きを増している。おそらく、平和であったこれまででは見ることもなかった明るい空だったのでしょうか。

そう言えば、11年前、3・11の東北の夜もこんなふうだった、と聞いたことがあります。

闇が深くなるほどに、空の星は輝いて見えます。それまで見えなかった小さな星も。

闇が広がるほどに、私たちのこころは、より目に見えないものに向かっていくような気がします。静かに、たしかに。

クリスマスの祝福が皆さまの上にありますように。



「マイクロアグレッションとは、ありふれた 日常の中にある、ちょっとした言葉や行動や状況であり、意図の有無にかかわらず、特定の人や集団を標的とし、人種、ジェンダー、性的指向、宗教を軽視したり侮辱したりするような、敵意ある否定的な表現のことである。」 (デラルド・ウィン・スー『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション』マイクロアグレッション研究会訳、2020年、明石書店)

最近よく耳にする「マイクロアグレッション (Micro (微小な) aggression (攻撃))」。ミッションからしだねでは、このテーマを取り上げて、職員研修を行いました。研修を通して、私たちの頭と心の中に刷り込まれている偏見、思い込み、固定観念が、日常の家族や友人との会話のなかで、あるいは仕事上の相談支援のなかで、無意識のうちに出てしまっていることがないか？ 私たちもまた、他の人からの一言に「ん？」とひっかかったり、もやもやしたり、傷ついたことがないか？あらためて考える機会になりました。以下は、研修を通して出た職員からの感想、意見です。

マイクロアグレッションと障がい

- 「社会復帰」という言葉。引きこもっている人、仕事をしていない人も社会の一員、社会の中で暮らしているのに、いったいどこに復帰するのか？
- 言語障害のある人に「会話はできなくても、頭は正常なのですね」と言った人。腹が立つた。
- ある実習生が「精神障がい者のことがよくわからないので、教えてください」と精神疾患をもつ当事者に向けてあいさつしたのを聞いて、びっくりした。
- 自分自身を振り返って、ある特定の利用者に対して、小学生に対するように話しかけていることに気づいた。対等な大人として見ていなかった。
- 「統合失調症」「発達障害」など障害名や疾病名で相手の特性を決めつけていることがある。一人の「ひと」を支援する視点が大事だとあらためて思う。
- 精神科、心療内科に通院しているというだけで「精神的に弱い」と解釈する人が多い。
- 支援者どうしで安易に「この人、すごく大変そうだな」と決めつけていることがある。
- 障害が重いか軽いかを論じることがあるが、それはこちら側の感じ方に過ぎない。大変そうに見えても、案外その人にとってはそうでもないかもしれない。
- 障がいのある人が「障がいは結婚しても不幸になるだけ」「障がいは子どもを持つべきではない」と他の障がいの者の前で持論を

マイクロアグレッションではないかと思う、引かかる言葉はありますか？

- 出身地に対する偏見「地名を聞いただけで「ガラが悪い」「ヤクザが多い」「言葉づかいが汚い」「当たり屋が多い」「京都人はいけず」「祖父母・父母が」沖繩出身なのに、沖繩弁を話せないんですね。(それを言った人に悪気はなかったと思うが、傍らで聞いていてなんとも言えない気持ちになった。沖繩では戦前から沖繩方言を使っていたらいけないという差別的な歴史があった。言われたご本人がどう感じているのかはわからないが：)」
- 国籍による決めつけ「見た目の決めつけ「〇〇の国の人なら、からいものが好きでしょ?」「お箸の使い方が上手ですね」「日本語上手ですね」「メイドイン〇〇だしね」「アフリカの選手だから、身体能力が高い」
- 性別による決めつけ「女(男)のくせに」「女子力」「女(男)は〇〇が好き・得意」「理系女(りけじょ)」「責任者と話したい」「はい、私(女)が責任者ですが」↓「男の責任者と話したいんだ」

マイクロアグレッションが起る原因・理由はなんだと思いますか？

- 育ってきた環境、親や出会った人からの考え方・教育・偏見・価値観の刷り込み。
- 自分の言動とその影響を考える客観的な視点の欠如。
- 想像力の欠如。相手がどう感じるか、相手の背景を想像することもなく、思ったことをそのまま言ってしまう無自覚さ。誰もが加害者にも被害者にもなり得る。
- 考えること、知ろうとする努力をストップしている。思考停止に慣れている。
- 自分のものの観方や言動の元になる「信条」に気づいたり、点検したり、疑ってみたり、

- 宗教に対する偏見「話す前から相手の信仰的態度や考え方を全般的に決めつけている。」
- 家庭・家族の在り方の決めつけ「独身女性が、見ず知らずの店員から『奥さん』と呼びかけられる。ある年齢以上の女性は結婚しているのが普通という感覚で結婚してなくても『奥さん』にひっくるめられる。親しみを込めているつもりなのかもしれないが：)」
- 既婚女性が、仕事モードの時に業者などから名前ではなく『奥さん』と呼ばれる。仕事上も男性の付属物、内助の功的存在としか見えてもらえていないと感じる。ただし、プライベートな場面で『奥さん』と呼びかけられても、他にしつくりいく呼び方が見つからないので、不快には感じない。逆に男性は『ご主人』と呼びかけられた時、どう感じるのか：?」
- 「さほど親しくない相手から『お子さんはおいくつですか?』と聞かれる。結婚していてもあたりまえ? 子どもがいてあたりまえ?」
- 「親しい人から『子どもは何人ほしい?』と聞かれる」
- 「大きな買い物をするとき、おそらくなんの悪気もなく、夫にしか話しかけない店員」
- 「ひとり親家庭で育ったとわかると、『大変だったね』とねぎらわれる」
- 「継父(継母)に育てられたとわかると、『かわいそうに』とあわれまれる」
- 「いわゆる『普通の家庭』で育っていない人はなんらかの精神的な問題を抱えているにちがいない、というフィルターを通して関わろうとされる不快感」

- 文化のちがいがい。人が生きていくとき、必ず何らかの文化が発生する。家族・友人・職場の中で育つ文化、趣味等個人のこだわりや特性から生まれる文化など。自分と異なる文化に対して、違和感を持ち無意識に排除しようとするのが人間。自分以外の者にたいする寛容さから生じるマイクロアグレッションは、文化との出会いの数だけ発生するのではないか。
- 異質なものを排除しようとする人間のさが。
- 優劣思考。
- カテゴリありきで個人やグループを捉えようとするときに出やすい。
- 情報源。テレビだけ見ているのか? インターネットなのか? 新聞なのか? 情報源の質も影響する。
- 現代でも「上級・下級」「勝ち組・負け組」などの言葉が飛び交うように、自分が相手より上であるという優越感が、無自覚に相手を蔑んでしまうのではないか。
- 宗教に対する偏見「話す前から相手の信仰的態度や考え方を全般的に決めつけている。」
- 家庭・家族の在り方の決めつけ「独身女性が、見ず知らずの店員から『奥さん』と呼びかけられる。ある年齢以上の女性は結婚しているのが普通という感覚で結婚してなくても『奥さん』にひっくるめられる。親しみを込めているつもりなのかもしれないが：)」
- 既婚女性が、仕事モードの時に業者などから名前ではなく『奥さん』と呼ばれる。仕事上も男性の付属物、内助の功的存在としか見えてもらえていないと感じる。ただし、プライベートな場面で『奥さん』と呼びかけられても、他にしつくりいく呼び方が見つからないので、不快には感じない。逆に男性は『ご主人』と呼びかけられた時、どう感じるのか：?」
- 「さほど親しくない相手から『お子さんはおいくつですか?』と聞かれる。結婚していてもあたりまえ? 子どもがいてあたりまえ?」
- 「親しい人から『子どもは何人ほしい?』と聞かれる」
- 「大きな買い物をするとき、おそらくなんの悪気もなく、夫にしか話しかけない店員」
- 「ひとり親家庭で育ったとわかると、『大変だったね』とねぎらわれる」
- 「継父(継母)に育てられたとわかると、『かわいそうに』とあわれまれる」
- 「いわゆる『普通の家庭』で育っていない人はなんらかの精神的な問題を抱えているにちがいない、というフィルターを通して関わろうとされる不快感」
- 文化のちがいがい。人が生きていくとき、必ず何らかの文化が発生する。家族・友人・職場の中で育つ文化、趣味等個人のこだわりや特性から生まれる文化など。自分と異なる文化に対して、違和感を持ち無意識に排除しようとするのが人間。自分以外の者にたいする寛容さから生じるマイクロアグレッションは、文化との出会いの数だけ発生するのではないか。
- 異質なものを排除しようとする人間のさが。
- 優劣思考。
- カテゴリありきで個人やグループを捉えようとするときに出やすい。
- 情報源。テレビだけ見ているのか? インターネットなのか? 新聞なのか? 情報源の質も影響する。
- 現代でも「上級・下級」「勝ち組・負け組」などの言葉が飛び交うように、自分が相手より上であるという優越感が、無自覚に相手を蔑んでしまうのではないか。

「からしだね」マイクロアグレッションを防ぐためにできることは？

- 「自分がされていやなことほしくない」にとどまらず、「相手がされていやなことほしくない」が苦手な人が多い。
- 利用者の言葉をよく聞く。何気ない会話の中に相手が「いやだ」と感じていることがかかれていくかもしれない。
- 利用者が「いやだ」と感じていることすべてが、マイクロアグレッションになるわけでもない。
- 職員の発言をよく聞く。不適切な発言をしていたら、お互いに指摘しあう。特にジェネレーションギャップで、指摘してもらわないと気づきにくいこともあるので教えてほしい。
- 個人の考え方、感じ方、捉え方は様々なので、すべてを防ぐことはできない。マイクロアグレッションを受けたときの対処の仕方、ストレスを上手に処理する方法をあらかじめ考えておくことも必要。揺れる力を身につけることが大事。
- 様々な事例に触れ、複数で検討する機会を持つ。
- 自分の言動が偏見に基づいていないかを、自問自答する習慣を身につける。
- 研修、学びを継続する。気づく力を高める。マイノリティに対する学びをする。
- 職員だけでなく、利用者も一緒に、マイクロアグレッションについて話し合う。

- えすぎて、自分の意見や気持ちが表示できないくなり、「コミュニケーションが成り立たなくなるのではないかと悩む。
- 誰もがすべてを知っているわけではない。完璧でもない。マイクロアグレッションをつつき合い、裁き合うのではなく、教え合う、対話ができる社会であってほしい。
- 職業や学歴で人をランクづけする考えが身につけてしまっている人の考えを変えることは難しい。ただ、時代の流れの中で、下だと思っていた職業が若い人たちにとっては憧れの職業になったりもする。時が変えてくれるということもある。
- 同じ高齢者であっても、「女性がたくさん入っている理事会は時間がかかる」と言った元総理大臣の発言は、その社会的な立場や内容から言っても、許してはいけないマイクロアグレッションだと思う。女性ボクサーのことを「嫁入り前のお嬢ちゃんが顔を殴り合っ」とコメントしてしまったスポーツ解説者については、マイクロアグレッションであっても、苦笑いしながら「許してあげて」という気持ちがないわけではない。
- 意識しない、学ばない、耳を貸さない、考えてみない、という問題は大きい。一方で意識しすぎること起こる弊害も出てくるだろう。頑なに譲らない層も一定割合存在するだろうが、揺れ戻しを繰り返しながら、程よいところに収まってほしい。
- それなりに信頼関係が存在するところでは、あまり大きな問題にならないのではないか。(だからと言って良いというわけではない)(言葉狩りが先行するのではなく、他者を

- 誰もが、その時の状況や置かれた立場によって、多数派にもなり、少数派にもなると思う。自分が少数派であったりその時関心を持っている問題に直面したときは敏感になるし、多数派にいて関心のない問題については鈍感になる。だからこそ、社会のなかの少数派が抱える問題や彼らが困っている問題に関心を寄せ、学ぶ必要がある。
- 情報を常に更新していく。
- ふだんから、まずは物事を考える「前提」を疑って、考え直すような対話を、職員間で行う。
- 毎日の朝礼や終礼、職員会議などで、お互いに報告と情報共有、意見交換をしているが、自分自身のものの捉え方や周囲の捉え方がどうなのか、考える機会になっている。

それは、マイクロアグレッション？それとも価値観の違いによる意見の相違？

- たとえば、県民性を誉めたりいじったりするテレビ番組がある。誉められてもけなされても、県民どうしの仲間意識みたいなものが芽生えておもしろかったりする。遊び(〇〇県人であることを、わざと過剰に誇っているふりをしている、わざと過剰に相手はいじっているふりをしている、という自覚のあるゲーム)でやっているうちはきつと、良いコミュニケーションにつながると思う。でもそれに政治的な意図が絡んだりして、遊びの範囲を超えマジになってしまったら、いじめやジェノサイドなどの怖いことに発展していく。

- 思いやる気持ちや態度を醸成することを考えたい。
- 自分でも知らないうちに無自覚なマイクロアグレッションをしているのではないかと思うと、穴があつたら入りたくなる。もし、マイクロアグレッションの場面に会ったなら、その場の空気に流されて笑ったりせずに、少しでも態度で「ノー」と示せるようにしていきたい。
- マイクロアグレッションを起こさないように気を付けようとは思っているが、無意識の中に培ってきたもの、時代にそぐわない考え方が、きつと自分の中にあると思う。また、ネット社会では何か間違ったことを言ったら、炎上してとことん叩かれてしまうツールができていく。言葉を発することに慎重になり過ぎて、深い対話が成立しなくなったり、当たり障りのない交流を続けてしまうことも懸念している。
- 対話がなくなってきた。ひとつの言葉の捉え方も様々なので、逆に「あなたの発言はマイクロアグレッションだ」と、マイクロアグレッションを相手を黙らせ攻撃する道具に使っている人も多い。真の意図を上手に伝える方法を考えていかなければならないと思う。
- 対人支援をしていく上で、自分を探ることが大事。自分で考え、人からの指摘を受け、それぞれに考えることが必要。
- マジョリティ(多数派)であることと自分が、じつはすでに暴力性を帯びている。他者性をもつ、相対化する、マイノリティの視点をもつことが大事。

マイクロアグレッションについて悩みも多い 失敗を許す思いやりも大事

- マイクロアグレッションについて、じつは2つ3つ自分で体験したこと以外は、なかなか思い浮かばなかった。改めてネットなどで調べると、自分が無意識に発している言葉もあった。以前みた「憎悪のピラミッド」という図式で、先入観・偏見による行為がどんどんエスカレートして一番上はジェノサイド(特定の民族・集団を計画的に滅ぼすための殺りく)になるというものを見た。小さい(マイクロ)攻撃でも積み重なると最後はそういうことになっていくので、気をつけていかなくてはと思った。
- 「おめでたいことがあった人に『おめでと』と言葉をかける行為は、その周囲に居合わせる自分のような不幸な境遇にいる者にとってマイクロアグレッションだ」と言う人がいた。大多数の価値観ではお祝いするのは当然でも、他者の喜び事をお祝いするのは嫌だという価値観の人もいる。ただ、それをマイクロアグレッションと言ってしまうと、他者の喜びを分かち合えない暗い社会になってしまう。もちろん一定の配慮は必要だが。横田めぐみさんのお父さんが、帰国した拉致被害者の喜びの姿を、一生懸命、写真に撮っていた姿が忘れられない。愛娘はそこにいないのに。深い悲しみさえとことん熟成させた美しさをそこに見た気がした。

- マイクロアグレッションにならないかと考

からしだねの研修で出た様々な意見、もしかすると思いがたることがある、と感じた方があられるかもしれません。

ポリティカルコレクトネス(略してポリコレ)という言葉があります。特定の民族や人種、宗教、性別、職業、年齢などに対して差別的な表現を避け、当事者が不快感や屈辱的な思いをしないよう配慮する、また一見、問題がなさそうでも今後の差別につながりそうな言葉や表現を選ばない、という姿勢や考え方を指すのだそうです。

ポリティカルコレクトネスの視点は重要だとしながらも、「行き過ぎた配慮」「行き過ぎた批判」「言葉狩りのような指摘」は私達の暮らしを息苦しくし、表現を制限し、対話をストップさせるのでは?という指摘もあります。研修の中でも、そのような意見が出ていました。

マイクロアグレッションは、相手を見下し、優位に立って、自分の立場を安定させたいと願う人のことから出ているのではないかと思えます。大切なのは、他者のマイクロアグレッションにばかり目を向けるのではなく、それぞれが自分の中の暴力性に目を向け、自分の中の「人を見下す気持ち」が誰かに対して牙をむいていないか、常に点検し続けることではないかというの、研修を通して学んだことでした。

皆さまはどうお感じになりますか? (S・M)

センター報告



主任 武山世里子
(精神保健福祉士)

からしだねセンターは、地域の障害のある方々の相談窓口として、2022年度もさまざまな相談を受けました。相談では、ご本人からのSOSではないものも少なくありません。ご本人のSOSはなくても、家族や近隣など、本人の周囲にいる人々からはSOSが発信されています。相談の中で、特に難しいのが、このような「ご本人が支援を必要としていない」場合です。今回はそのような相談の「コマをシェアさせていただきます。(個人が特定されないように、少し変更を加えています)」

・Aさん(20代の発達障害の女性)
家族や友人との関係で常にストレスを抱え、それが爆発すると暴れて警察が介入……こんな繰り返しをしてきたAさん。そんな彼女が風俗で仕事をみつけてきました。仕事は過酷ですが、そこで同じような境遇の女性たちと仲良くなりました。孤独だった彼女はかけがえのない友人を得たのです。だから、3日続かなかった仕事を何か月も続けています。今は、複数の男女が彼女の家に入り浸るようになりまし。給料はもらっているのに、家賃の支払いが滞り、自宅にごみがあふれ、この先同じ生活ができるとは思えない状況になっています。友人以外は彼女の生活を制限する存在だと思っっているようで、私たち支援者は仕事が見つかってからは、ほとんど会ってくれなくなりました。

・Bさん(40代男性 双極性感情障害)
Bさんは、うつの時は何もできなくなり、トイレすらも自分で行けなくなります。しかし、躁の時は別人のように行動的になります。躁でもうつでも、大きな不安が常にBさんを支配しており、少し頭が痛い、「脳



ワークス報告



主任 鍋島愛信
(精神保健福祉士・社会福祉士)

いつも「からしだねワークス」を覚えてご協力・ご支援いただき有難うございます。
2022年もいよいよ締めくくりを迎え、年度としても9ヶ月を経過しました。この間も皆様同様、新型コロナウイルスの影響を受け続けています。

就労支援事業においては物価上昇の影響は大きく、材料費や消耗品は軒並み値上がりしていますが、販売価格の値上げはそう簡単にはできないので正直大変です。配食サービスは委託事業のため特に値上げが難しい(京都市から500円以内と決められている)のですが、カフェの食事と違いお弁当箱や配達用のガソリン代が必要なのでコスト面はかなり厳しくなります。

文句ばかり言っていられないので、無駄の削減や効率面で工夫しながら頑張っています。利用者さんからも積極的な節約アイデアや協力も得られ、就労支援としてはとても良い教材、教訓になっています。
もう一つ直面している課題はワークスの利用者が減っていることとお休みが多くなっていることです。これは施設運営上とても重要なことで、より多くの利用者が決められたシフトを休まずに来られ、必要な支援を提供することで施設収入(福祉サービス提供に対する報酬)が安定するからです。

利用者が減っている一つの要因として考えられるのが、ワークスのような就労継続支援B型事業所が増え続けているということ。事業を始めたら利用者確保しないと収入は得られないので、各事業所はあの手この手で利用者確保に取り組みます。
就労支援を受けたいと考える方々にとっては選択肢が増え、自分に合った事業所、環境や設備が整い、工賃が高いところを選べるメリットがあるでしょう。ある種の競争によりサービスの質が向上することも良

腫瘍かもしれないので、MRIをとる」と検査の予約をします。先日は、検査の結果で大きな問題が指摘されていないにも関わらず、保険適用外の薬を使って治療すると言って聞かれません。医療への依存は顕著なのですが、検査をしないのに「大丈夫です」と言い切れず、本人の言うままに検査をする病院。生活保護のため、どれだけ医療にかかっても基本、本人の財布が痛むことのないBさんは、とにかく、検査と薬を最大限手に入れることに必死になっています。

・Cさん(50代女性 統合失調症)
Cさんは20代の息子と古い持ち家で二人暮らしをしています。高校の頃から引きこもった長男は、ずっと自宅でゲームをする生活。数年前から長男の様子がおかしくなり、異常なまでのこだわりと、自分の思い通りにならない時にCさんに暴力をふるうようになりました。対人と関わることがしんどくてできないCさんはSOSを呼ぶこともできず、長男にされるがままになっています。もともと片付けることが苦手なCさんですが、少しずつ、家の中にごみが増え、今は足の踏み場もありません。しかし、どんなごみであっても長男がそれを処分することをゆるさず、今は汚臭と害虫だらけのお部屋です。Cさんは長男に抗う力もなく、長男の嫌がる支援者を遠ざけ続けています。

誰かが何かをしないとイケない状況なのに、当事者がそれを受け入れる状態にない……

このようなことはこの支援センターでも起っています。制度や福祉の枠組みでは解決できない問題は年々増えているように感じています。解決の糸口は、「つながり」でしかないと考えています。

医療や福祉の専門職だけが作りだせる「つながり」には限界があり、それをいかに地域の中に作っていくのが、支援センターとして力を注いでいかねばならないことだと考えています。

新しい年は、この「つながり」について、具体的な実践を積み重ねていきたいと願っています。

い事だと思えます。

一方で、ほとんどの事業所はしっかりとした福祉マインドを基礎に持ち、福祉に貢献する理念を持ったところだと思えますが、必ずしも全てがそうだとは言えないのも事実だと感じています。長年じみちに、就労が難しい方々の支援を丁寧に行きつづけて来られた事業所が、制度上は十分に評価されず、コロナの影響もあって閉鎖を余儀なくされ、同業者としても残念に思う事が起こっています。かたやビジネスベースで「儲かる儲からない」で参入・撤退されているように見える事業所もあり、福祉制度としての就労支援とは？を考えさせられています。

私たち、からしだねワークスも法人の理念、支援の考え方に基づいた就労支援を展開し続けていけるよう、専門性を磨きながらも普通の感覚を忘れない取組みを続けていきたいと考えています。「あそこで頑張ってみよう」「あそこなら自分の願いに近づいていけるのではないか。」と思ってもらい選んでもらえるよう頑張っていきます。

そしてもう一つ、利用者のお休みが多い理由として、やはりコロナの影響は小さくないように感じています。単に感染したから、濃厚接触者になったからということではなく、新型コロナウイルスが社会にもたらした様々な影響による「何か」がうごめいているように感じます。このことは各世代、将来に渡って様々な影響・結果として見えてくるような気がして不気味です。

デジタルツールによりもたらされた利便性やポジティブな事もたくさん生み出されたことも忘れてはいけません。マスクをした大人しか見ない生活が多い、子供の育ち、リアルな対面の機会が減った人間関係、ネット利用で完結してしまう様々な生活の要素、マイナスの影響は今見えてくる事や感じている事にとどまらず、将来に渡って予想できないところに現れてくるのではないのでしょうか。

そういう時代における福祉就労支援の在り方、新たに持つべき視点などを考えながら、これからの「からしだねワークス」の進むべき方向を見定めていきたいと思っています。

今後ともご注目ください。ご意見やアドバイスもいただければ参考にさせていただきますと思っています。いつもありがとうございます！



2022年8月～12月
(ありがとうございます)

ご寄附者様

石川 裕二様
伊藤 順子様
インマヌエル枚方キリスト教会様
木場田 幸子様
京都信愛教会様
近藤 宏 栄恵様
櫻井 郁夫様
田中 淳様
戸谷 御国様
那須 佳子様
鍋島 久代様
ノートルダム教育修道女会様
野田 秀様
畑 陽子様
林 貞子様
深谷 与那人様
藤田 明子様
不破 弘様
三浦 良夫様
三谷 洋子様
村社 孝子様
山崎 春幸様
山本 裕子様
吉村 和記様
よつ葉ホームデリパリー京滋様
脇 巖様

後援会ご協力者

青木 秀次
青田 勝彦 惠子
飯田 妙子
石川 裕二
磯野 純子
一木 訓治 茂子
伊藤 順子
茨木 恵子
岩田 和子
内山 映子
江口 真理
大川 史
岡 美智代
奥野 英子
長田 啓子
尾上 慶子
梶村 順子
梶村 慎吾
加瀬 裕子
勝藤 美代子
勝本 博子
加藤 哲也
加藤 庸子
兼松 哲夫 好子
蒲池 國光
河島 朝子
川瀬 勝也

岸川 萌木
北山 繁美
木村 宥子
工楽 康代
倉信 範子
小金丸 幹夫
小柴 順子
小島 悦子
佐倉 富男
櫻井 郁夫
砂川 孫四郎
砂地 一廣
竹中 一彦
竹山 隆造
多田出 佳代子
田中 康夫
谷 暢宏
玉田 貞子
丹野 敏弘
寺井 直江
戸谷 御国
中野 富美子
中村 博子
中村 禮子
那須 佳子
鍋島 久代
萩原 武

長谷川 和雄
畑 陽子
林 貞子
広岡 貞之
廣田 正子
藤田 明子
藤原 まさ子
細見 忠雄
前川 洲子
増田 理恵
松栄 純子
松岡 弥生
松本 聡子
松本 美穂
三浦 良夫
湊 つね子
村社 孝子
森 尚江
森川 恵子
山崎 春幸
山根 ひろみ
山本 真実
山本 裕子
和田 義則
渡邊 日登美
山下 愛子
前波 明子

CLC からしだね書店支援 ご協力者様

井上 貴詞
インマヌエル京都伏見教会
内山 映子
江口 真理
長田 啓子
梶村 慎吾
蒲池 國光
空閑 浩人
小柴 順子
竹中 一彦
竹山 隆造
丹野 敏弘
中村 博子
野崎 康明
萩原 武
花見 眞弓
松本 聡子
森川 恵子
山崎 信義
山根 ひろみ
山本 真実
和田 義則
渡瀬 富美江
前波 明子
名巧社

(敬称略)



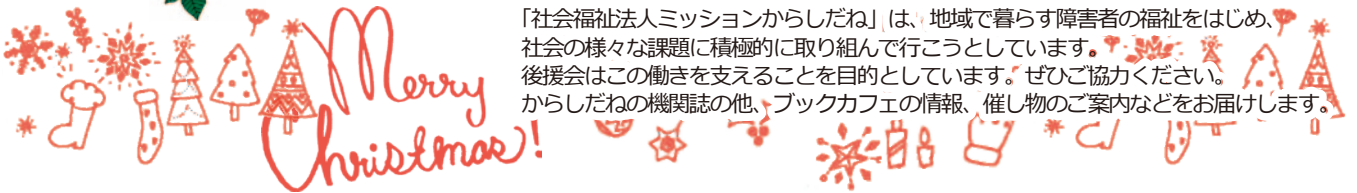
後援会協力を:

後援会入会・継続には、同封の振込用紙をご利用ください。

寄付金控除領収書をご希望の方は、振込用紙の通信欄に「寄付用領収書希望」とお書きください。

年会費
会費
振込先

個人様 1口 3,000円
団体様 1口 10,000円
郵便振替 ※既にお振込みいただいている会員様は、お見逃しください※
口座番号 00970-2-222380
加入者名：社会福祉法人ミッションからしだね後援会



「社会福祉法人ミッションからしだね」は、地域で暮らす障害者の福祉をはじめ、社会の様々な課題に積極的に取り組んで行こうとしています。後援会はこの働きを支えることを目的としています。ぜひご協力ください。からしだねの機関誌の他、ブックカフェの情報、催し物のご案内などをお届けします。

編集後記：2022年は、日々更新されていくコロナウィルスの情報とどう付き合っていくのか、悩み続ける1年でした。今のところ職員には感染者は出ていませんが、何人かの利用者さんが感染しました。幸い大事に至らず皆さん元気からしだねに通ってられます。◆2月にはからしだね館正面にロシアのウクライナ侵攻を憂うコメントをはりだしました。また、職員がこの戦争を憂っている東京在住のロシア人と面会し、ウクライナの人たちだけでなく、ロシアの人たちも、またジョージアをはじめとする周辺の国の人たちも、この戦争によって深く傷ついている現状を知りました。◆戦争のない平和で思いやりのある世界を築いていくためには、一人ひとりが小さな努力を重ねていくことしかないと思いついたため、一人ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は『不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君』と呼ばれる。(旧約聖書イザヤ書9章6節) 皆さまの上にクリスマスの祝福がありますように。迎える2023年が平和で幸せな年になりますように。(S.M.)



書店だよりは、毎月発行です。こちらで、お読みいただくことができます。→→→→→



からしだね通信の次号は2023年7月の予定です